'The man in the Celestial Sphere'
— *Songs and Sonets* の世界 —

早　川　正　信

Songs and Sonets において Donne が描いている男女の愛の世界は A. J. Smith によれば 'serious' なものと 'extravagant' なもの (1) との相剋であるように思われる。Donne が生きた時代は14世紀にその端を発し15.6世紀にヨーロッパ大陸で絢爛たる花を咲かせたルネサンスの風がイギリスにも吹き寄せた時である。従ってこの時代は中世的な禁欲と秩序の箍が緩み一方には神と，一方には新しく勃興した科学が混然と同居している状態であった (2)。とりわけイギリスでは全盛のエリザベス朝が終焉をつげシエームズ王が君臨するにつれて一層複雑な不安が無気味な腫瘍のように随所に吹き出す次の時代への過渡期であったのである。このような時流で演ぜられる男女の愛も又，太陽に向い雄々しく立つような溢ふれるばかりの人間性の発揚という形態をとらなくなるのは当然と思われる。愛の具体的発現は解放的又は集団的方向ではなくいきおい密室的・個人的傾向に陥るのである (3)。

Songs and Sonets においてもこの愛の具体的表現である個人的愛は詩人と恋人の＜個＞と＜個＞が＜一＞なるものに合一してしまうという形でなされる。＜一＞なるものに合一した愛は頑ななまでに密室閉鎖的であり「巧妙に造られた壺」(4) を思わせるまでである。しかしさしも固いこの壺が敢えなく崩潰の危機に直面する場合が生ずる。それは詩人と恋人の「別離」という試練において惹起される。*Songs and Sonets* ではこのようにして合一された世界の成立と崩壊が Donne の愛に関する哲学の重要な支柱の同一原理の二面的展開であると考えられる。つまり愛の 'dramatic' な演技の極がこのような強い感情を引き起す二つの事実において集約的に見られるからに他ならない。この二面の展開は愛の多様性の根本原因を宿す 'sphere' を造るものであり多岐なる諸現象は集約的にここに拠って来ると思われるのである。小稿に於ては＜一＞なる世界が作られ又は＜一＞なる世界が潰れる際に見られる要素と現象を通して中世的叡知人 Donne が 'Love Song' に託したものを考察することである。

〔I〕

Songs and Sonets 55編に＜合一＞が強く現われる場合と特徴を考えてみたい。これらについては一般的には 'Satisfied Love' の極として取り上げられて来た詩の中で特にここでは 'The Good-Morrow', 'The Sun Rising', 'The Canonization' を中心として考えたい(5)。しかし従来 'Satisfied Love' として考えられているような愛の恍惚の外面的現象ではなく＜合一＞を起す要素がいかに働いているかを見ることである。

I wonder by my troth, what thou and I
Did, till we lov'd? Were wee not wean'd till then ?
But suck'd on country pleasures, childishly ?
Or snorted wee in the seven sleeper's den?
'Twas so; but this, all pleasure fancies be.
If ever any beauty I did see,
Which I desir'd and got, 'twas but a dreame of thee.
And now good morrow to our waking souls,
Which watch not one another out of fear ;
For love all love of other sights controls,
And makes one little room an everywhere.
Let sea-discoverers to new world have gone,
Let maps to other, worlds on worlds have showne,
Let us possesse one world, each hath one, and is one.

My face in thine eye, thine in mine appeares,
And true plaine hearts doe in the faces rest,
Where can we finde two better hemispheres
Without sharpe North, without declining West?
What ever dyes, was not mixt equally ;
If our two loves be one, or, thou and I

Love so alike, that none doe flacken, none can die.

(The Good-Morrow : 1—21)

この詩で詩人は恋人の裏切りには一切疑問をいだいておらぬように振舞い世俗の出来事には頓着せず南風の薫ずる丘の上に立つかのようである。ともかくも「好ましき愛の半球」に行こうと告げる。その半球は，Without North' であり 'without West' である時間・空間を超えたものでありもはや世俗的尺度計では測れない 'timeless'(6) である愛の桃源境であるに違いない。 彼らの愛以外のものは全て彼らの愛に優らず全て無意味なものとなる。更には現世からのがれたいという逃避的色彩をも見出すことも出来る。

And make one little room an everywhere,

(The Good-Morrow 11)

小さく 'seclude' された部屋は詩人にとって安住の場となり中世武士の鎧を身にまった詩人を連想させるものである。もし詩人が当時のごく一般的な若者のように血気にはやる若者で新大陸の踏破や対蹠地征服の野心に燃えていたとすればこの 'seclusion' はかびの臭いのする 'den' にすぎなかったであろう。しかし詩人は一般的世情には背を向け堅く身を曲げ自己を守るかのような姿勢をとるのである。更に 'one little room' を誰にも侵されぬ確かなものにするため当時流行していた新科学と地理上の発見に関するイメージを駆使して愛の世界を「掩護」している。この方法は<一>なる世界の安全確保のために物理的な反作用性を利用すると言う形でなされている。換言すれば詩人の視点や関りのある地点を当時の人々に魅力あらしめたものに置きこれを押しやるように否定することにより確かな世界にこもれることになるのである。言及が魅力ある事物に及べば及ぶ程<一>なる世界は反比例的に狭小となる。

Let us possesse one world.

(The Good-Morrow 14)

なる気持が一段と浮き彫りにされて来る。このように見れば<一>なる世界にこもる人々は 'Satisfied' な状態でありながらも時代のもたらす「恐怖」というものを引き被りややすれば頽廃的に見える場合さえある。

'The Sun Rising' ではこの言及が太陽にまで延長されることとなり J. Bennett が指摘しているように(7), 'Busy old fool…' という型破りな冒頭から第三連に行くに従い愛は 'Satietied' されたものとなる。

Love, all alike, no season knows, nor clyme
Nor houres, days, moneths, which are the rays of time.

(The Sunne Rising : 9—10)

愛がこの世の尺度を超えることは先の場合と同じである。更に

She's all States and all Princes, I,
Nothing else is.

(The Sunne Rising : 21—22)

Alas, as well as other Princes, wee,
(Who Prince enough in one another bee,)

(Anniversarie : 13—14)

詩人は時間・季節を支配する大地球の運行をも超越した宇宙の王者となり王国は宇宙の中心となる。'This bed thy center is, / There walks thy sphere.'(8) の意味は科学によって覆えされた天動説の擁護でありそれほど 'bed' は確かなものなのである。'The Good-Morrow' においては渡洋や故事が愛の防波堤であったように中世的宇宙の「秩序」をとりもどすことにより時代への 'Rebel' をなしていると言えよう(9)。この展開は 'The Canonization' に至って一層甚だしいものとなる。詩人は冒頭にて早くも

For God sake hold your tongue, and let me love
Or chide my palsie or my goat
My five gray haires, or ruin'd fortune flout,…

(The Canonization : 1—3)

と不明の友に向って心境を打ち明けている。半ば自らを嘲笑するような態度で他人の干渉を振り切ろうとしている。

Alas, alas, who's injured by my love ?
What merchant's ships have my sights drown'd ?
Who sais my teares have overflow'd his ground ?
When did my colds a forward spring remove ?
When did the heats which my veins fill
Add one more to the plaguic bill ?

Soldiers finde warres, and Lawyers finde out still
Litigious men, which quarreles move
Though she and I do love.
(The Canonization 10—18)

詩人は‘Love Affairs’を演ずる事が少しも第三者に迷惑を及ぼさぬことを当時の傷害事件・金もうけ本位の商船の行方・疫病死亡者名簿など日常茶飯でありながら常に興奮と不安を惹起せしめた不吉な諸事件をもって愛の世界を守っている。更にこの事柄は‘fly’と‘taper’の比喩(10)で述べられるが‘candle’の消滅が自らの命をこがすのみだから他に迷惑のかからぬことを言う。この二人だけが磨り減る「業」が溶け合うことにより彼等は完全な個体になることを象徴している。

So to one neutral thing both sexes fit,
Wee dye and rise the same, and prove
Mysterious by this love.
(The Canonization: 25—27)

溶け合った自らの中に二人は‘Eagle’で象徴される勇壮と‘Dove’によって引き起される優しげなものを見出す(11)。この喜びと調和は人間のなせる業でなく完全に‘Divine’なものとなる。しかしこの神々しいばかりの展開は次の段階では何物かに怯えた「広所恐怖症」なる症状をも呈してくる。

And if no peace of chronicle wee prove ;
We'll build in sonnets pretty roomes :
As well a well wrought urne becomes
The greatest ashes, as half-acre tombs,
And by these hymnes, all shall approve
Us Canoniz'd for Love
(The Canonization 31—35)

遂に詩人は「半エーカーの墓」より「壺」の中に入りたいという蠻居的心境に陥ってしまう。「壺」には恐らく中世的模様が附してあり壺の中では恐怖から身を守る本能的な防禦の形のように背を円め脚を折り怯えた詩人の眼をのぞき見ることが出来るようである。

〔Ⅱ〕

次にこのようにして出来た「壺」が潰れる場合を見て行きたい。特にこの現象が強く現われる‘The Song’, ‘A Valediction: of weeping’, ‘A Nocturnall upon St. Lucy's Day, Being the shortest Day’を中心に論ずることとする(12)。これらの中では「壺」が空虚な「抜殻(Carcase)」に変る場合が多い。‘Carcase’は詩人が旅立とうとする時「壺」の中にきつく入りこんだ彼と恋人の両性の魂が抜け出る場合に起る。だから‘Carcase’は「別離」が原因で惹起されるものである(13)。

‘The Song’では最初に何故別離が行われなければならぬかを言いわけめいた口調でのべる。第一連では「別離」は「死」に譬えられ「一度は死なねばならぬ身であるから……」と死の深刻なることを引合いに出し別離の深刻を緩めようとしている。しかし詩人自らが不安を漏らしてしまう。第三連は‘O how feeble is mans power…’(14)と人間の非力を嘆き第四連では‘—s’, ‘—'st’‘th—’の音が入り乱れて出現し二人の吐く溜息がお互いの魂を削る苦悶が表現されている。

When thou sigh'st, thou sigh'st not winde
But sigh'st my soule away,
When thou weep'st, unkindly kind,
My lifes blood doth decay.
It cannot bee
That thou lov'st mee, as thou say'st,
If in thine my life thou waste,
Thou art the best of mee.
(The Song. 25—32)

以上のように見て来ると人間の深淵を探ることが出来る思考をもってしても知り得ない未知の世界に横たわる無気味なものへの恐怖感に押し流され神のみが知る未来の展開に詩人は祈る気持になるのである。

Let not thy divine heart
Forthinke me any ill,
Destiny may take thy part,
And may thy fears fulfill ;
But thinke that wee
Are but turn'd aside to sleepe ;
They who one another keepe
Alive, ne'r parted bee.
(The Song 33—40)

詩人は思わず叫びたくなる死の恐怖に駆られたのであろうか詩行も短い先を急ぐ調子の一連で「別離」の試練に耐えようとしている。このように荒海にのり出す船旅の明暗のイメージに「壺」の崩潰の過程を託しているがこれの延長である「水」は‘A Valediction: of weeping’

などに見られる「涙」の形で二人の住む丸い天球について我々に語りかける。

Let me powre forth,
My teares before thy face, whilst I stay here,
For thy face coines them, and thy stampe they beare,
And by this Mintage they are something worth,
For thus thy bee
Pregnant of thee ;
Fruits of much griefe they are, emblems of more,
When a teare falls, that thou falst which it bore,
So thou and I are nothing them, when on a dives shore,
(A Valediction: of weeping 1—9)

二人の存在する世界が涙の中に現われるが遂に頬をつたい落ちてしまう。その後は丁度「二人が違った土地に居る」ような‘nothing’に帰すというのである。‘Fruits of much griefe they are, emblems of more’は二人の世界の有意義性を述べるものであろう。従って涙が落ちるとき愛の小宇宙が崩潰し Donne 自らの世界も消滅してしまう。第二連では涙は大地球儀となる。‘round ball’は‘Europe’も‘Afric’も‘Asia’をも含む全世界図であり彼女がこれを具現している。恋人なる彼女は詩人が海を渡る時にいだく不安と同様に不安を内臓した存在なのである。

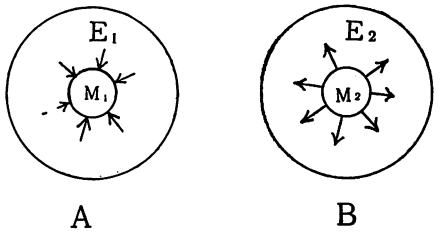
A globe, yea world by that impression grow,
Till thy teares mixt with minde doe overflow
This world, by waters sent from thee, my heaven dissolved so.
(A valediction : of weeping 16—18)

幸福な愛の国はついに空が落ちて押し流されそうになるがこれは William Empson の言う‘Antediluvian’(15)なものであり‘unhappy’な事件を予告するものであろう(16)。詩人自身の航海の不安と婦人の貞節に対する当時の倫理的な観点からの懸念とも考えられる。第三連ではこのイメージは「溺死」の設定でなされる。世界は‘Noah’の洪水直後のそれのように‘vacant’なもの，つまり‘carcase’になってしまう。

All others, from all things, draw that's good,
Life, soule, forme, spirit, where they beeing have,
I, by loves limbecke, am the grave
Of all, that's nothing. Oft a flood
Have we two wept, and so
Drowned the world, us two; oft did we grow
To be two chaoses, when we did show
Care to ought else; and of absences
Withdrew our soules, and made us carcasses.
(A Nocturnall Upon St. Lucy's day,
Being the shortest day 19—27)

詩人にとり寒空に死んだ彼女への愛は‘nothing’なものと言い更にそれを昇華して‘Quintessense’(17)なる世界の森羅万象を形成する「形相・質料」を含めたものにまでしている。悲しみの中にも「無」を通して永久なる根源的なものへ向いたいと言う詩人の願いを聞くことが出来る。

以上述べて来た事柄を総括的に見れば次の二つの点に帰着する。



第一は Donne の描く愛の世界の極は上の図に示されるようなA，Bの二つであり夫々での愛のマイクロコズムをM1の世界，M2の世界とする事が出来る。これらの世界を覆う時代の文化的様相についてはJ. E. V. Crofts が Donne についての著書‘John Donne: A Reconsideration’(18)でのべているように従来伝統を誇り支配的立場を占めていたペトラルカ的讃辞と Donne の詩や Joseph Hall らを含めた‘strong line’一般が弁証法的な相剋をなしていた時である。伝統的な中世からの宇宙観が除去され「新らしきもの」と「古きもの」との渾沌の時代であったと言ってもよいだろう。このような基調をもちながらM1の世界は一般的には‘Satisfied’であるとして分類されて来たものである。この中で詩人の欲求は一般に愛がいつもそうであるように周囲から隔絶されたいという公式的なものとしてのみ考えられぬようであるが，その欲求はかたくななまでに「のがれ」又は

「逃避」の意識が働いているように思われる。つまり‘Satisfied’という行動表現は「恐怖からののがれ」の表現の一型類ではないかと思われる。 Donne 自身の‘Love's Alchemie’に用いられたであろう水銀のように丸く小さくなりたいと願う心なのである。しかしこの状態は詩人自身の内的な課題によって丸く固まろうとはしない。また恋人の優しげな思いやりが詩人にその心を惹起させているのでもない。その固く狭い部屋を作る工匠はマイクロコズムM1と相互的関係をなす‘Active’な要素を周囲に見出しそれを否定することによって反作用的にM1を守っている。もしM1と相互性をもちM1を包み込む周囲をE1 (Environment) と名づけるとすればE1の作用が強ければ強いほどM1は小さくなりしかも密になるのである。詩行の中に見出せる現象という点からだけすれば 詩人はM1の内側からE1に力を放射する形となるがその放射のはね返りを利用するという形になるのである。詩人の態度は従って最終的には自らは行為的ではなくむしろ E1に暗示をうながすことにより他律的な性格を示すものであるとも言えよう。換言すれば静かな心にとりつく不安に詩人は怯えるのである。

ところがBでは M2 と E2 の関係がAの場合とは逆の方向に要素が働いていると言えよう。それは「別離」という重大事件のために「不安」を惹起することに起因する。 Donne 自身の生涯を考えても言ることはM1におけるように世俗的流行に背を向けることはあったにせよ国政の重要な地位を得た時は海外に渡航せざるを得ぬ場合も多々ありもしその航海が成功を細め得たような時には彼は時代人としての意気を感じたのではないかと思われる。しかしながらその高揚した意気も当時の航海そのもののように危きものであり寸分違えば急天直下，彷徨と不安の淵へとたたきおとされる代物であったのであったろう。のみならずA.J.Smithが述べているように当時の‘Love’の風俗からみても‘Love’が一種の‘sport’であった(19)ことなどから婦人の貞操にかかわる不安がますます不安を増大させたのである。ここに Donne の二律背反の彷徨が始まるのである。 M2 の世界はこのような心境が具体的な形として現われて来たものとして考えられる。「別離」は当時では「この世から別離」するという正真正銘の「死」に隣接していたからM1とは異る「恐怖」に捉えられるわけである。現象の面では旅という M2 から外に出るという重大な放射が働くため逆に内的な思惟が働くのである。先にのべた静かな所にとりつく不安に比して動こうと欲する心にとりつく不安とも言えるのではないだろうか。このように考えてみるとM1における‘Satisfied’された愛もM2における‘Parting’に起る愛もただそれだけでは Donne の意図するものではないと言える。何故ならば前者は「恍惚なるものから永遠」に後者は「無なるものから永遠」にという不安の充満する現世から他の空間にのがれたいという一原理の二面的展開とも言えるのである。この衝動がいわゆる‘meta-’なるものへの飛翔の誘因として考えられる。

第二は Donne はA，Bの世界を通じて肉体的愛をも永遠なるものへの必然的過程として擁護している点である。例えば

> Whether both the Indian's of spice and Myne
> Be where thou leftst them, or lie here with
> Ask for those Kings whom thou saw'st mee
> yesterday,
> And thou shalt heare, All here in one bed lay.
> (The Sunne Rising : 17—20)

というように太陽に向って‘bed’の優位を主張する。また愛する両者が「火のように身をこがす蛾」であり燃え上る情火のために身を滅ぼしその中から‘Divine’なものとなり飛び立つという次の一連からも肉体的愛を飛翔させる詩人にとり肉体的愛は必然的な善なのである。

> We are Tapers too, and at our owne cost die,
> And Wee in us finde the ‘Eagle’ and ‘Dove’.
> The Phoenix ridle hath more wit
> By us, we two being one, are it.
> So to one neutrall thing both sexes fit,
> Wee dye and rise the fame, and prove
> Mysterious by this love.
> (The Canonization : 21—27)

〔Ⅲ〕

では Donne が標榜するところの「真の愛」とはいかなるものであるか。当時の愛の風俗においては‘Love’は‘sport’としての性格を持っていたことは先に述べた(20)。しかし Donne にとっての愛の理想についてはJ. Bennett 女史が示しているように愛妻 Ann に対する Donne の心境を書いた一文と詩行の一部に結論を見出すことが出来る(21)。

> We had not one another at so cheap a rate as that we should ever be weary of one another.(22)

> All other things, to their destruction draw,

Only our love hath no decay;
This, no to morrow hath, nor yesterday,
Running it never runs from us away,
But truely keepes his first, last, ever lasting day.
(The Anniversarie : 6—10)

かてて加えて当時一流の知識人として彼が持っていた学殖と教養は彼を「自由・放縦」で頽廃にさえも結びつきがちな愛の表現よりも中世的な禁欲的道徳とまではいかぬまでもその中に在った道徳律を加味して時代を生きたいと考えたのではないかと思われる。だからHerbert. J. C. Grierson の 'Donoe's Love Poetry' が示しているような「中世の恋歌の弱さは禁欲主義と相容れぬ点であった(23)」という点は 'dialectic' な表現と奇警を用い巧みに前の時代の要素と当代の要素を混ぜ合わせている。その奇抜な 'conceit' の中に 'body' によって愛が生まれ更に 'soul' にまで高揚されねばならぬ道理を 'cynical' に展開しているのである。皮肉や揶揄は Songs and Sonets の中で自由奔放にあばれ回るかに見えるが Donne はところどころに皮肉や揶揄が自分を放れて根なし草のように飛ばぬよう折にふれ自分の方に意識的に引きよせているのがわかる。引きよせる力の拠りどころはやはり中世的な思考によってなされるようである。この心は, Elizabeth Drury の一周期に書かれたと思われる 'An Anatomie of the world', The First Anniversarie' において感知される。

And new philosophy calls all in doubt,
The element of fire is quite put out ;
The Sun is last, and th' earth, and no mans wit
Gan well direct him where looke for it.
And freely men confesse that this world's spent,
When in Planets, and the Firmament
They seeke so many new, they see that this
Is crumbled out againe to his Atomies.
'Tis all in peeces, all cohaerence gone :
All just supply, and all Relation :
Prince, Subject, Father, Sonne, and things forgot,
For every man alone thinkes he hath got
To be a Phoenix, and that then call bee
None of that kinde, of which he is, but hee.
(An Anatomie of the world, The First Anniversarie 205—218)

この様なわけであったから Donne にとっての 'Love' の定義は中世の 'Schola' 派哲学に見られる古い 'Astronomy' に根拠を見出す。作品中 'Air and Angels' と 'The Ecstasy' に見られる 'spirit' と 'soul' と 'body' の世界に安心立命の地を求める。'Spiritual' な愛は 'soul' から成立ち 'sense' により発現されるものである。ところが元来 'sense' は 'body' に具わっているとされるから 'soul' はその点において 'body' と結びつくことになる。このように Donne の 'body' の愛により 'Spiritual' なものに到達出来るという構図は Donne が単に高遠な理想と理解困難な教義のみによって愛を考えたのではなく自己の生きた時代と愛の理想との関係が全くの空想でない事を裏づけるものである。'Air and Angels' の第二連では当代の愛の在り方に厳密な定義を与えている。

While thus to ballast love, I thought,
And so more steddily to have gone,
With wares which would sinke admiration,
I saw, I had loves pinnace overfraught,
Ev'ry thy haire for love to worke upon
Is much too much, some fitter must be sought ;
For nor in nothing, nor in things
Extreme, and scattering bright, can love inhere ;
(Air and Angels 15—20)

愛の存在の仕方は余りに行きすぎても不可能なものであり不足であっても不可能なのである。神が定めた摂理による均等な姿でなければならないとする。丁度物質の混合が均等である状態の時に生ずる調和なのであり先に 'The Good-Morrow' で見た 'If our loves be one, or thou and I love so alike'(24) の一連が蘇えってくる。J. Bennett 女史によればこの状態の愛は 'Ptolemic doctorine of cycle and epicycle'(25) であり 'cycle' と 'epicycle' は Divine なものに続く道を明示してくれる。このイメージは 'A Valediction : Forbidding Mourning' においてもかの有名なコンパスの描く円により代表されるものであり旅に出ようとする詩人と残される恋人との関係が空間を貫いてなお持続されることを願う気持に現われて来る。大陸を行く詩人が遠くに行けば行く程コンパスの支柱にあたる恋人の魂は傾斜せねばならぬのである。ともかく世間一般で演ぜられる愛は, Dull sublunary lover's love／(Whose soul is sense) can not admit／Absence…(26) なものであるが彼等相

互の愛は

> But we by a love, so much refin'd
> That our selves know not what it is,
> Interassured of the mind.
> Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.
> (A Valediction : Forbidding mourning 17—20)

なるものとなり 'timeless' なものになる。'The Ecstasy' では男女両性の 'soul' の融合が 'Complete' なものの誘因となる。双方から抜け出た魂は 'such fingers need to knit, That subtle knot' に変貌し 'spirit' により「合一」された有機的存在に変ってしまう。もともと人間の魂は 'vital', 'sensitive' 'rational' なものに分化されるが愛は再びこれらを混ぜ合せて<一>なるものにするのである。以前には微小であった魂が全ての欠点をも被いきる遠大なものになる。

> This Extasie doth unperplex
> (We said) and tell us what we love,
> Wee see by this, it was not sexe,
> Wee see, we saw not what did move :
> But as all severall soules doth mixe againe;
> And makes both one, each this and that.
> (The Extasie 29—36)

> Wee then, who are this new soule, know,
> Of what we are compos'd, and made,
> For, th' Atomic of which we grow,
> Are soules, whom no change can invade.
> (The Extasie 45—48)

と魂の永久不変をうたい上げる。しかし次には

> But O alas, so long, so farre
> Our bodies why doe wee forbeare ?
> (The Extasie 49—50)

と決して肉体を置き去りにはしておかない。なぜなら肉体は魂との相互性によって不可分なものであるからである。

> They are ours, though they are not wee, Wee are
> The intelligencies, they the sphere,
> We owe them thankes, because they thus,
> Did us, to us, at first convey ;
> Yeelded their forces, sense, to us.
> Nor are drosse to us, but allay.
> (The Extasie 51—56)

魂は肉体と結合することにより価値を高めこそすれ決して価値を落すことにはならない。のみならず肉体は魂と魂の融合を密にするものでありその強さは 'sense' の介在によって益々強くなって行く。そのようにして結合された魂は他の<一>なる魂に流れ込み大宇宙をも貫ぬく完全に 'Divine' なるものに高揚されるのである。Donne が描く魂の結合が同時代の形而上詩人の中でも肉体を台とする点では特異であることを指摘して J.Bennett 女史は次のように述べる。

> Unlike Herbert, Vanghan, and Crashaw, Donne never, even in his religions poetry, belitted physical love : no poet has paid more consistant homage to a complete human relation. (27)

だから Songs and Sonets 55編中にも随所にこの理念の展開がみられ例えば Donne の鬼才が最もよく現われているといわれる 'The Flea' の中に見られる巧みな口説は Donne が肉体を介在として得られる愛の力の偉大さをいかに認識していたかを物語るものであろう。(28)

以上の諸点から Donne の愛の哲学においては 'body' により支えられた愛が詩人の在る立場で擁護され序々に高揚されて時間をも超越した宇宙を貫く柱となる。そこに必然的な存在として認識される 'soule' による愛が生まれやがて飛翔して「神の恩寵」に敬虔に答え神の正しい配剤を感知する道に詩人は到達するのである。神の道への厳しい試練のために 'body' は有意義な存在を完うすることを義務づけられることになる。Donne にとって人間を含めた森羅万象が 'Metaphysical' なものに出発するには 'physical' なものに一度帰着し 'spirit' により 'meta-' なる世界に入るという道程が必要であったのではあるまいか。この過程での彷徨が遂には Donne を宗教詩の領域に運んで行くように思われる。(29)

〔Ⅳ〕

さて最後に〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕において論じた実践的な愛の二平面と〔Ⅲ〕にのべた愛の哲学との出合いはどう説明されるかを考察してみたい。

Songs and Sonets 55編中に見られる<一>になる世界の「離合集散」は内から外に発せられる反社会的な要

素をもって反作用的作用により自らの世界を固めようとする型と「別離」によって崩潰する際に起る愛の吐露があることを確かめた。これらの<二>にして原理の<一>なる世界はいづれも Donne が生きた当時の社会，とりわけ愛の風俗を詠い上げたものであるからいわば「形而下」（physical）なものの存在する世界である。大陸から遅れて英国にたどりついたルネサンスという時流の中で爛熟期の甘い実のなる「巨木」のいただき附近で演ぜられる愛の展開であった。このような世界に対し Donne は「思わず言ってみたい衝動」に駆られた時に漏れる自由勝手な揶揄をとばしながらいつのまにか彼自身の定義を与えていたのである。このような背景をもって派生した二つのマイクロコズムのイメージは根底においては共通である。なぜなら集合型（M_1）では地理的又は新科学へのイメージが多いし離散型（M_2）では旅のイメージが多い。これらは同様に「不安」と「恐怖」を代表するという点では同じとなる。従ってM_1，M_2 を拡大延長して行けば当時の時代相というものが具現されるわけでありM_1，M_2 なる平面が次元のちがった現象ではなく比較可能な同一平面をもつことになる。結局二平面を共通な「不安」が被っている格好になるが「不安」の原因は Donne 自身の内的葛藤とも外的なそれとも区別しがたいようである。これについては J. E. V. Crofts が彼の著 'John Donne : Reconsideration' で Donne の内的彷徨を記して

> The Frangment stands among Donne's works like a huge and multipulated inscription, The object of the verb is uncertain ; the verb itself obscure ; but there is no doubt that the sentence begins with the person "I" .
> And for Donne everything did so begin and end. Throughout his life he was a man self-haunted, unable to escape from his own drama unable to find any window that would not give him back the image of himself.(30)

と外的不安が及ぼした彼の内的彷徨の状態について明らかにしている。Donne のこの態度については Donne の失意の時代にモンテーニュと共に英国に入ったといわれる懐疑的な趣向(31)に Donne は甘んじていたとは考えたくない。なぜなら深刻な懐疑は 'death' という人間にとり不可避な無気味な巨人的課題にとりつかれてしまうからである。この課題を背負いながら Donne はM_1，M_2 という小宇宙を飛び出したい衝動に駆られている。しかしこの衝動は〔Ⅲ〕に検討した愛の哲学にみた 'body' による愛を考えるならば直ぐに可能になる容易事である。なぜならばM_1，M_2 において 'body' により愛は決して否定されたものではなかったからである。両面において擁護された肉体的愛は固く結合さるべきものであることは 'The Anniversarie' にもあるように

> When bodies to their graves, soules from their graves remove.
> (The Anviversaric : 19—20)

と言う。つまり「肉体の墓場」なのであり「墓場」はマイクロコズムM_1とM_2を意味するものと思われる。そうすれば無気味に迫り来る「死」のために別離の度毎に模擬的に演ぜられた「死」の舞台はこの「墓場」なのである。先にのべたように Donne の現世における肉体的愛の擁護はこの墓より高く抜け出で魂に出合う肉体の存在する狭い世界で行われていると言える。墓穴は恐ろしく狭隘なものであるがこの墓がM_1，M_2を含むものとすればいわゆる「形而下」の世界は「形而上」的世界にくらべていかに狭小なるかを比較され得る。換言するならば，M_1とM_2なるマイクロコズムの関係は二つながら 'horizontal' な横軸を形成しこの軸を土台として飛翔する一筋の摂理は 'vertical' な縦軸を作るとも言えよう。この 'horizontal' なものと 'vertical' なものの密なる結合は 'body' によりなされるというとも可能である。こう見ると Donne は現実と思想的空間を単に 'philosophycal' に考えていたのではなく横軸と縦軸とにより構築される世界を作る匠であったことが立証されるのである。何故なら横軸の上に二つの愛の世界（sphere）を置きそれらを含む大宇宙的'sphere'が更に大きく同心円を描く格好をとるからである。あたかも'A Valediction; 'Forbidding Mourning' で用いられたコンパスで画く円のように Donne は大宇宙が 'Divine' なれと祈るのであろう。この大なる 'Sphere' で奏でられる妙なる調和をなす音楽は次のごとく響きわたるのである。

> We consist of three parts, a Soul, and Body and Minde : which I call those thoughts and affections and passions, which neither soul nor body hath alone, but have been begotten by their communication, as Musique results out of our breath and a Cornet.(32)

Donne はこの'Sphere'の中を彷徨しながら'Musique' を求めさまよったのである。そして遂には荒野をさまよう旅人が天なる星に望みを託したように宗教的な一点の

明りに望みを託して行くのである。

以上論じて来たことから結論を述べれば Songs and Sonets における愛の諸現象の最大公約数は Donne にとっては好ましい半球の構築であったのである。最下位に「墓場」なる平面を設定し「恐怖・不安・肉体」により象徴される現実でいわゆる「形而下」の小半球を作っている。また「魂」によって象徴される「形而上」の上部半球が垂直に設定させる。これらの 'vertical' なものと 'horizontal' なもののなす大半球の立体的空間の中を Donne は魂と共に「真」なるものに向って飛翔しようと願うのである。「形而下」において詩人の心胆を寒からしめた「死」の問題も恐らくは「形而上」的半球の極にあると思われる「神」の摂理に続く道に回帰することにより救済をえることが出来るのであろう。

ともかく Donne は人間の奥底にある「虚無」と「不安」に絶えず脅やかされながら混迷の中にも何かがあるのではないかと自ら問いながら Songs and Sonets をうたい戯言に素顔を被わせながら中世的な「秩序」の回復をこれに託したのではないかと思われる。

テキストは Herbert J. C. Grierson : The poems of John Donne, volume i , The text of the poems with appendixes. (Oxford at the Clarendon Press) 1963. を使用した。以下特別な指示がない場合は本テキストの該当頁数を表わす。

(1) A. J. Smith : John Donne, The Songs and Sonnets. (Edward Arnold) 1964. P54

(2) J. E. V. Crofts: John Donne: A Reconsideration (Twentieth Century Views, A Collection of Critic al Essays Edited by Helen Gardner) (Prentice-Hall, Inc, Englewood Cliffs, N.J) 1962. P77

(3) J. B. Leishman: The Monarch of Wit (Hutchinson) 1962. P223

(4) P15 The Canonization LL. 33
'…… a well-wrought urn'

(5) J. B. Leishman : op. cit. P179 Leishman は Songs and Sonets 全体の詩を要素別に7つの型に分類している。その6番目の中には次のようにある。

(6) Twenty poems, including the problematical Nocturnall, and the Dissolution, which, although the relationship between wit and passion, intellect and feeling, is by no means uniform, are neverthless, as a group, more serious, more impassioned, more tender, and, one cannot but feel, more personal and less detached than the rest, and of which it is tempting to suppose (how justifiably I shall proceed to consider) that some were at least partly inspired by Ann More :

と述べ The good-morrow, The Sunne Rising, The Canonization, Air and Angels, The Anniversarie, A Valediction: of weeping, A Nocturnall Upon St. Lucies day, A Valediction: forbidding mourning などを挙げている。従って本稿では Ann を軸にして展開される詩を中心に論ずることになる。Ann が Donne にとっていかに大きな精神的支柱であったかは本稿〔Ⅲ〕においても述べたが J.Bennett 女史も John Donne に関する著 'Five Metaphysical Poets' (P20) で Ann の愛情がいかに Donne の 'character' をはぐくんだかを述べている。

(6) A. J. Smith : op. cit. P55
'Their love alone exempt from time, and makes them unique, superior to all the world's hours and riches, and even to the sun ;

(7) Joan Bennett: Five Metaphysical Poets (Cambridge at the University Press) 1964 P40

(8) P12 The Sunne Rising LL. 30

(9) A.J.Smith: op. cit. P49—P54

(10) P15 'The Canonization' LL. 21—22

(11) P15 ,The Canonization' LL. 22

(12) J. B. Leishman : op. cit. P179

(13) O. E. D 1961, C の頃 P109 に見られるように

(1) The dead body of man and beast. (3) In later times, in application to the human body, dead or alive, it has gradually come to be a term of comtempt. などから (5) The decaying skelton of a vessel or edifice などを含む語として扱うべきではなかろうか。

(14) P19 'Song' LL. 17

(15) William Empson: Seven Types of Ambiguity. (Chatto and Windus) 1965. P142 LL 6—7
'… suggests, instead of a mere heap of world-tears, such a flood as descended upon the wickedness of the antediluvians.

(16) William Empson : op. cit. P141 LL. 6

(17) P44' A Nocturnall upon St. Lucies day, Being

the shortest day' LL. 15

(18) cf (5)

(19) A. J. Smith : OP. cit. P47—P49

(20) cf. (19)

(21) J. B. Leishman : OP. cit. P184 又，同要旨のことを Bennet 女史も述べている。
J. Bennett : op. cit. P20 LL. 9

(22) J. Bennett : op. cit. P20 LL. 10—11

(23) Herbert. J. C. Grierson : The poems of John Donne, volume ii, Introduction and Commentary (Oxford at the Clarendon Press) 1963. XXXV LL. 24—27

(24) P8 'The Good-Morrow' LL. 20—41

(25) J. Bennett : op. cit. P33

(26) P50 'A forbidding mourning' LL. 13—15

(27) J. Bennett : op. cit. P25 LL. 32—35

(28) P40 'The Flea' LL. 3—9
又，S. L. Bethell : Gracian, Tesauro and the Nature of Metaphysical Poetry (1953) において特に Tesauro の理論と酷似する。

(29) George Williamson : The Donne Tradition (Th Noonday Press) 1958. P50—51
Donne's subject matter is mainly love and religion, to which he brought immense learning, variety of mood, and perhaps one dominating idea. He range from sensual to mystical conception of love is an old story, but less hackneyed is the relation of this range to his religious thought. This relation involves another relation which is his dominant idea, the relation of soul to body, or the theme of 'The Extasie' and, in one way or another, of so much of his poetry….
と述べ Donne の 'body' から出発して 'religious' なものへの過程を詳しく述べている。

(30) J. E. V. Crofts : op. cit. P82

(31) George Williamson : op. cit. P17

(32) George Williamson : op. cit. P24 において Letters (1910) no. XXV で Donne が述べた主旨を引用している。

その他の参考書目

Herbert J.C.Grierson: Metaphysical Poetry Donne to Butler. (Oxford Paperbacks) 1965

Izaak Walton: Lives of Donne and Herbert. (Cambridge at the University Press) ed. by S.C. Roberts. 1962
同じく The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert, Robert Sanderson. (Oxford Unieversity Press) 1962

Doniphan Louthan : The Poetry of John Donne, an Explication, (Bookman Associates) 1951

佐山栄太郎 : 形而上詩の伝統（研究社） 1958

村岡　勇 : 形而上詩の諸問題（南雲堂） 1965

E.M.W.Tilliard : The Elizabethan World Picture. (Chatto and Windus) 1960